

すばる望遠鏡 ファーストライト・シンポジウム

いよいよ完成まであと2年あまりとなったすばる望遠鏡のファーストライト時（試験観測開始から定常運用開始までの約2年間）の望遠鏡運用計画を検討する場として、第1回の‘すばる望遠鏡ファーストライト・シンポジウム’が1月9日（火）～11日（木）の3日間にわたり国立天文台（三鷹）で開かれた。連日、予想をはるかに超えた数の参加者が詰めかけ、会場はパンク状態会場では冷房のスイッチが入られるほどの熱気をおびた討議が交わされた。ここに簡単にシンポジウムのレポートをします。

国立天文台では平成10年度第1四半期の完成を目指し、口径8.2mを有する大型光学赤外線望遠鏡（通称：すばる望遠鏡）を米国ハワイ州ハワイ島マウナ・ケア山頂に建設中です。ドーム建設現場での火災事故などの障害等にも拘らず、すばる望遠鏡計画は急ピッチで進められており、その完成まであと2年あまりとなりました。このシンポジウムは、すばる望遠鏡の完成から、予定されている各焦点が完成し、定常運用に移るまでの試験観測期間の望遠鏡・観測装置の運用体制と予想される性能についての理解を深め、より有効な観測研究計画の展開をはかることを目的として開かれました。

第1日目は、すばる望遠鏡計画の責任者である海部宣男（国立天文台企画調整主幹）からの進捗状況説明、そしてプロジェクト・サイエンティストの家正則（国立天文台教授）によるファーストライト時のスケジュールの説明があった。さらに、すばる望遠鏡ファース

トライト時における他の天文台での大望遠鏡計画、宇宙科学研究所が2002年の打ち上げを計画している次期赤外線天文衛星計画IRISをはじめとした天文衛星計画の動向などの紹介があり、ファーストライト時点での状況をイメージする助けとした。その後、これらの状況をふまえてユーザーとしての期待や要望についての討論が行われた。

2日目は、丸1日を費やし、現在製作が進められている7つの観測装置：

- ・微光天体撮像分光装置（FOCAS）
- ・近赤外線撮像分光装置（IRCS）
- ・コロナグラフ撮像装置（CIAO）
- ・中間赤外線撮像分光装置（COMICS）
- ・高分散分光器（HDS）
- ・OH夜光除去分光器（OHS）
- ・主焦点モザイクカメラ（Suprime-Cam）

そして

- ・波面補償光学装置（AO）

の担当者からそれぞれの観測装置についての、開発状況、機能と予想性能、運用スケジュールと体制等、についての紹介があった。

そして、最終日の午前中は、他に計画されているユニークな観測装置をすばる望遠鏡に使っての



写真1 海部宣男（国立天文台企画調整主幹）からのすばる望遠鏡計画進捗状況説明。



写真2 連日予想をはるかに上回る熱心な参加者が詰めかけたために、会場のうしろの方で立って真剣に発表を聞く参加者。

観測提案（3D分光器，中間赤外線分光撮像装置（MIRFI）等），さらに，すばる望遠鏡用の観測装置としての“主焦点広視野近赤外線モザイクカメラ”の提案があった。最後のセッションである午後には，太陽系天文学，星形成研究，惑星系の形成，銀河団中の銀河の進化，クエーサー・サーベ

イ，宇宙論と大規模構造の各視点から，すばる望遠鏡と計画されている観測装置を使つての野心的な観測計画の提案が披露された。

今回は，その第1回目ということで国立天文台・観測装置製作者側からの予定の説明にほとんどの時間が費やされたが，それらの情報を基にしたより現実的かつ意欲的なファーストライト時の観測研究計画についての討議を次回は期待したい。今回のシンポジウムは，準備不足にも拘らず予想をはるかに上回る熱心な参加者にめぐまれ，なかでもその大半は若い（大学院生

を主とした）研究者であり，彼らのすばる望遠鏡への関心と期待の高さを再認識した。この場を借りて世話人一同から参加者の皆様に改めてお礼を申します。

関口和寛（国立天文台すばる望遠鏡プロジェクト室）

すばる望遠鏡仮組一般見学会報告

2月9日（金）大阪上空は薄い雲が立ちこめ，その間から冬のやわらかな日差しが日立造船桜島工場を照らしていた。すばる望遠鏡は現在国内での仮組試験そして数々の動作試験をほぼ完了し，また解体されて近々ハワイへ輸送される。その出発前に今日は一般の方々へのお披露目ということになった。ドームに入ってしまうとナスミス翼などはドームの陰になってしまうため，望遠鏡全体を眺めることができるのもこれが最後の機会となる。

約530名の応募があり，抽選で下は3

